
靴音

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

靴音

【Nコード】

N5710P

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

十年前のあの日の靴音は忘れない。

カツツカツツ……。

あの靴音はあなた。

あなたはアパートの鉄の階段を音を立てて上がった。

あなたは覚えていないでしょう、十年前の中学生のことなど。

雨が降り続いた六月。あの日は急な夕立が降って来た。ブラウスもぐつしより濡れて透けていたからなのか、あなたは音も立てずにいきなり押し入って来た。一階が車庫、二階、三階が住宅だった。あなたは私を押し倒し、ブラウスを引き裂き、紺の襷スカートをまくりあげて、下着を一気に下ろした。

まだ本当に何も知らなかった中学生の小娘に。あなたは煙草臭く、髪は見事に七三に分けてはいたが、手はごつごつとしていてグレーの安っぽい背広がみすばらしく見えた。

「こんなこと誰にも言えないだろう。ここは人に触らせるもんじゃねえ」

そう言いながら指先が割って来る。恥ずかしいことより恐怖が先に立ち必死に足を閉じようとしても、膝を入れてくる容赦ない残酷さ。

少女は自分のされてることへの屈辱が嘔吐をよび畳に吐くと、その汚物が背広にかかった。

「何しやがる」

いきなり、頬を叩いた。

目を見開いてあなたの顔を目に焼き付けた少女が、

「一生許さない」

と、心の誓ったことをあなたは知らない。

どれほど時間が経ったのか。

「お前は俺にこんなことされても文句は言えないんだ。文句があれば父親に言え」

あなたはそう言った。

「親父の仕事がどんなものか知ってるのか。あんなべらぼうな金利のせいで女房も子どももみんな出て行った。俺にはもう何も残っていない。あいつの一番大切にしているものを奪うことにしたのさ」

そう言いながら、あなたは無造作に制服のスカートで自分の放出した液を拭くと、背広の汚れを台所の水道で洗った。

父のいないことを確認してから来たのか、あなたは一つも慌てていなかった。

「初めてだったんだな。これはいいわ」

嘲笑うように投げやりな口調。汚れた制服、破られたブラウス、穿いたままのソックス、足首に降ろされた白い下着、スポーツブラがまくりあげられ、乳房は唾液で濡れている惨めな中学生を誰か助けて。

あなたはティッシュケースを放ってこう言った。

「拭いてみな、女だってわかるから」

足の付け根に血液が流れていた。生理とは違う鮮血だった。

周りは雨の音がするだけ。

車の音も、道行く人の声も何も。

あなたが出ていくと、雨はより激しくなり、風呂場で泣き叫ぶ少女の声もかき消された。

カッツカッツ……。

あなたの足音。

被害届を出しても見つからなかったあなた。

あれから十年経った。

地元に住むことはできず、高校から都会へ出たあの少女。少女の父親は簡単に金を出した。だが、それは負い目があるからに他ならない。地元にはいてほしくなかったのだろう。

雨が急に降り始めたあの日。

あなたはついに姿を現した。

小さな二階建てのアパートに上がって行くあなた。

あの靴音。

カツツカツツ……。

一人暮らしのようだった。あなたは向かいのアパートに引っ越してきた女を知らない。

「お嬢さん、あそこは随分古いし、セキュリティもないよ」

「いいんです。会社に近いですし、お金がないから」

不動産屋は金がないというと、あっさり契約書を交わした。きつとマンションなどはこの女には無理と思ったようだった。

あなたはラブホテルの従業員だった。夜勤で夜の十時から朝の六時まで。帰りにコンビニで買い物をして帰って来る毎日。顔を会わすことなどなかった。

眼鏡を掛け金色に染めた髪など、あなたが知っている少女ではない。

「仕事の帰りですか」

「あ、どうも。そうです」

コンビニの従業員とそんな他愛もない会話を交わした。あなたは従業員が誰なのか気付いていなかった。

偶然、隣のアパートと分かると、あなたは嬉しそうに話した。

「昔は羽振りのいいことしてたんだ」

「そう」

「小さかったけど食品会社の卸もしていたんだ」

「へえ、すごいね」

久しぶりの女性との会話をあなたは楽しんでいるようだった。

あなたは女も好感を持ってくれていると信じて疑わないようだった。

「美味しい牡蠣が好き。七輪で食べたいわ。お酒も一緒に」

そんな言葉に、あなたの目は輝いた。高いものを欲しがらずに七輪で焼いた牡蠣を食べたがる女。あなたは週末に七輪を買ってきた。通販で頼んだ牡蠣が届くと、家にうまいものがあるから来ないかと女を誘った。

美味しい牡蠣と若い女。

あなたが七輪に火をつけていた時、女も自分の七輪に火をつけて男の風呂場に置いたことをあなたは知らない。

「牡蠣を焼いていてね。私、美味しいお酒を持ってくる」

あなたは焼いているうちに意識がもうろうとしてきたようだ。体の自由がきかなくなったあなたが見たのは、制服姿の女。

「忘れたの、十年前の中学生」

あなたは恐怖にひきつった顔を見せて、そのまま倒れた。

牡蠣の焼ける音が聞こえる。

「まだしばらくは寒い日が続くことでしょう」

テレビから天気予報が流れてくる。

「しばらくはあなた一人ですって」

静かな夜にハイヒールの音がだんだん遠ざかって行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5710p/>

靴音

2010年12月18日20時10分発行